

東

京を代表するレトロ建築、東京駅丸の内駅舎。威厳と懐かしさを感じさせるその威容は、東京のシンボルとして愛されている。

駅舎の設計は当初、ドイツ人の鉄道技師フランツ・バルツァーによって進められた。しかし、煉瓦造りの上に瓦屋根を乗せるという和洋折衷案に、洋風の壮麗な駅舎を期待していた明治政府が難色を示したという。

そのため明治36年（1903年）、駅舎の設計は新たに当時の日本建築界の第一人者、辰野金吾に委託された。

辰野はバルツァーの設計案を軸に、赤煉瓦に白い花崗岩の水平線を走らせ、半円のドームをシンメトリ（左右対象）に配置した、後に「辰野式」と呼ばれる設計案を書き上げる。

設計中に日露戦争が日本の勝利で終わったこともあり、国威発揚ムードのもと建築予算も大幅に増額。アジアの強国の中央駅としての威容も求められ、設計期間は8年にも及んだ。

そして大正3年（1914年）12月、東京駅は完成。

正面に皇室専用の玄関である御車寄（おくるまよせ）が設けられ、右（南）側が乗車口、左（北）側が降車口とされた3階建ての駅舎は、正面長334・5m。まさに当時の日本を代表する建築だった。



東京のレトロ建築を歩く

第 1 回

東京駅 丸の内駅舎

宵闇に浮かび上がる丸の内駅舎





DATA

名 称 東京駅 丸の内駅舎
所在地 東京都千代田区丸の内1丁目
完 成 大正3年(1914年)
設計者 辰野 金吾

構内には完成当時の遺構が多く保存・展示されている



復原された丸の内駅舎南ドーム内観。8羽の鷲のレリーフは復原されたもの



行幸通りより丸の内駅舎を望む



窓周りの意匠も完成時の姿を復原している



煉瓦鉄骨造りの駅舎は関東大震災にも大きな被害はなかったが、これは耐震設計に重きを置いた辰野の功績といえる。しかしながら、太平洋戦争中の昭和20年(1945年)5月25日、空襲による焼夷弾でドームと3階部分が焼失。終戦後、駅舎の南北ドームを三角屋根に、3階建てを2階建てとして、東京駅は鉄道の要駅として使用され続ける。

平成15年(2003年)、東京駅が国の重要文化財に指定されたことを契機に、完成当時の姿への復原の気運が高まり、平成19年、保存・復原工事が始まる。平成24年に現在の姿に甦った。

完成時から残る部分は、極力保存されている。復原した部分も、煉瓦は当時のものに近い形で新たに製作され、天然石を使用した屋根は、当時の葺き方で再現されている。

ドームの外観は、詳細な写真や図面が残されていたため、復原が比較的容易だったものの、資料の少ない内部の復原には苦労したという。保存されていたレリーフ(浮き彫り細工)は修整、強化され、焼失したものは少ない資料を元に復原されドーム内を彩っている。

駅舎の内外には、東京駅の歴史を思い起こさせる見どころが多数ある。夜のライトアップも一度は見たいところ。